

霞

—2019年度春季展示室だより—

土浦市立博物館

令和元年5月11日発行(通巻第46号)

当館では「霞ヶ浦に生まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころを紹介するものです。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(46) 古写真「土浦市制施行記念式典会場」



昭和15(1940)年11月3日、土浦町と真鍋町の対等合併による土浦市制施行の式典会場になった亀城公園の様子です。櫓門の正面には「土浦市制施行記念式々場」と書かれた大きな立て看板があり、左右に日章旗が立てられています。紅白幕がまわされたテントの下に人影があり、受付の準備が行われているようです。この夜、市内は提灯行列で賑わいました。【情報ライブラリー検索キーワード「行事」「役所」】

目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(46)・・・1
- 博物館からのお知らせ・・・1
- 【館長講座及び各展示と催し物等】
- 新たな須恵器窯跡の発見(古代)・・・2
- 帰城の道のりを書き留める(近世)・・・3
- 商家の掟(近世)・・・4
- 絵葉書「空都水郷の土浦」(近代)・・・5
- 市史編さんだより・・・6
- 【新】土浦藩土屋家の横顔・・・7
- 霞短信 ナゾの井戸掘り用具「アオリ」、出現!・・・8
- コラム(46)・・・8
- 情報ライブラリー更新状況・・・8

博物館からのお知らせ

★★新館長 系賀茂男の館長講座「館長が語る歴史物語」★★

6/30・7/28・8/25・9/29・10/27・11/24・12/22・1/26・2/23・3/29

全10回(いずれも日曜日)

テーマ: 平安時代の政治・経済・社会・信仰(宗教)を中心にお話します。

会場・定員: 博物館視聴覚ホール・70名 時間: 午後1時~3時 受講料: 1,000円(全10回)

申込: 往復はがき(住所・氏名・電話番号)を博物館宛てに郵送。6/16(日)当日消印有効・抽選。詳細はHP又はお問合せください。

★★はたおり体験★★ 6/15・6/22・6/29・7/6・7/13・7/20(いずれも土曜日)

さき織り(裂いた古布をよこ糸に使う織り方)を体験します。 ※要申込。詳細はHP又はお問合せください。

★★土浦ミュージアムセミナー2019★★ 土浦地域の歴史について、学芸員が研究成果をお話します。

- 6月9日(日)「中世武家墓の伝承」比毛君男
- 6月16日(日)「城下町土浦の祇園祭」萩谷良太
- 6月23日(日)「貯蔵する生活—縄文中期の集落遺跡」関口満
- 6月30日(日)「筑波山麓の古代のみち」堀部猛
- 7月7日(日)「上高津貝塚周辺谷底低地における調査成果」亀井翼

会場: 考古資料館 体験学習室
 時間: 各回午前10時~11時30分
 受講料: 各回50円(資料代)
 定員: 各回50名(申込不要・先着順)
 お問合せ: 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
 (029-826-7111)

★★文化財愛護の会「土浦の先賢の碑と拓本」展★★ 6月8日(土)~7月15日(月)

★無料開館のお知らせ 5月18日(土) ※国際博物館の日

★今年度の春季展示 5月11日(土)から6月30日(日)までです ※休館日は毎週月曜日です



博物館マスコット
亀城かめくん

新たな須恵器窯跡の発見

お の うらやまかまあと

—小野裏山窯跡—

土浦市内の新治地区には、筑波山から連なるなだらかな山々が横たわります。春も盛りになると、地区背後の山々には萌黄色の木々の中にヤマザクラの薄桃色が点在し、市内でも特徴的な光景を目にすることができます。平成24(2012)年、地区内の小野と石岡市柴内地内の山腹を貫く朝日トンネルが完成し、車窓からこのような春のひと時の光景を目にした方も多いことと思います。

平成22(2010)年5月、小野地内の字裏山では朝日トンネルの掘削と道路改良工事が進められていました。トンネル入口にあった沢の底が削られ、野積みされた搬出土を目にした市民から、須恵器の破片が多く含まれているとの情報提供がありました。そこには、歪んだ須恵器も含まれ、沢の周辺に須恵器の窯跡が存在する可能性が高まりました。工事に先立ち、土浦市教育委員会による現地踏査も行われましたが、竹藪であったため土器などは確認できませんでした。一般的に、須恵器の窯跡は斜面地を掘り込んだ窯体(登り窯)の中に、粘土をロクロ成形して乾燥させた土器を並べ、薪をくべて高温で焼きました。窯体の下部には薪をくべる焚口があり、そこから下には灰や不良品を捨てた灰原がつくられました。

同年6月、茨城県教育庁文化課と市教育委員会などによる工事箇所周辺の現地踏査が行われ、トンネル入口西側の標高60m前後の急斜面で須恵器を含む黒色土の灰原(写真左)が確認されました。灰原より高所にある窯体は後世の削平によりすでに失われていました。これらの状況から、この窯跡は新発見の小野裏山窯跡として登録されました。出土した須恵器の多くは灰色で焼きしまり、杯、甕、鉢(写真右)などの器が確認され、年代は平安時代(9世紀前半)のものと判断されました。

もともと新治地区に横たわる筑波山塊東麓は、須恵器を生産した数々の窯跡の存在が明治時代から知られてきた地域です。これらの窯跡は総称して新治窯跡群と呼ばれ、古代の常陸国内を代表する須恵器生産地の一つと評価されてきました。しかしながら、本格的な調査はほとんど行われておらず、その実情は不明なところも多くあります。新たな窯跡の発見は同窯跡群の実態に一石を投じるものといえると同時に、それを把握することの難しさを示しています。(関口満)



小野裏山窯跡の現地踏査(白丸が灰原)



出土した須恵器(下段の中央と右は歪む)

6/8(土)11時・14時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも古代コーナーに展示)

- 栗山窯跡出土の須恵器(当館所蔵)
- 東城寺寄居前窯跡出土の須恵器(当館所蔵)



きじょう

帰城の道のりを書き留める

あつなお つちうらどうちゆうえす

—土屋篤直筆「土浦道中絵図」—

江戸時代に土浦藩を長く治めた大名土屋家は、基本的には江戸で生活をしていました。これは土屋家が代々幕府の要職を勤めていたことによります。しかし、藩主は年に一度は土浦に帰城していたようです。

4代藩主篤直（1732～76）は宝暦6（1756）・7・8年と、帰城する際の行程や土浦の地で過ごした詳細を日記（「土浦在城中覚日記」）に記録して遺しました。これらの日記は現在、東京都立川市の国文学研究資料館に保管されています。篤直は享保17（1732）年6月30日に3代藩主陳直の次男として生まれました。父陳直が同19年に40歳で亡くなると、わずか2歳足らずで家督を相続し藩主となりました。

篤直は日記以外にも帰城の行程を記録して遺しました。それが「土浦道中絵図」です。これは宝暦8年9月に篤直が江戸から土浦へ帰城した際、その道のり（水戸街道）を絵図として認めたもので、篤直27歳の作品です。絵図は江戸の箕輪・千住大橋付近から始まり、水戸街道の松戸・吾孫子（我孫子）・牛久などの宿場町を経て土浦城下に至ります。絵図には細かな情報まで書き込まれており、宿場や田畑の様子、街道沿いの寺社はもちろんのこと、道中にある道標までも記載されていることが分かります。

このうち土浦城下付近に注目すると、街道と城内の関係性がよく分かります。江戸方面から来て最初に通ることとなる高津口の前の馬出は、方形の「角馬出」（写真左）であり、土塁が設けられていたことがよく分かります。これは貞享2（1685）年に大規模改修がなされましたが、明治6（1873）年には撤去されてしまい、現在はその姿を見る事ができません。城下を通り過ぎ真鍋口を出た位置にも馬出が形成されており、丸形が二重に組み合わされた、「二重丸馬出」（写真右）であったことが見て取れます。これは慶長8（1603）年の設置とされており、完成当初は半円形であったようです。貞享3年に追加する形で馬出が築かれたため、S字型の二重構造となりました。この馬出も明治6年頃には改修されて姿を消しました。

馬出は虎口（城の出入り口）の外に設けることで敵の侵入を防ぐ防御施設としての役割がありました。馬

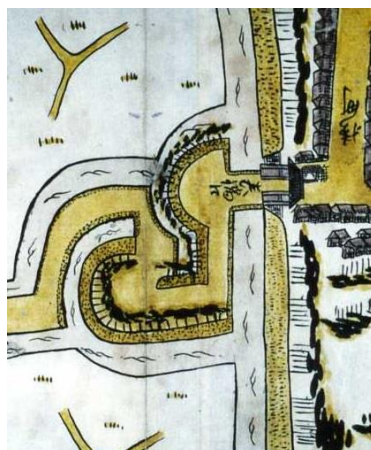
出が街道と重なり、城下を通過する例は全国的にも珍しいものでした。現在では馬出の姿はわずかに残るだけとなっていますが、江戸時代当時の土浦城下と水戸街道の構造との関係性を示す貴重な資料です。

（西口正隆）

「土浦道中絵図」（個人所蔵。土浦市指定文化財。展示は写真版）



角馬出



二重丸馬出

6/15（土）11時・14時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも当館正面玄関前に展示）

- 土浦領境界石（当館所蔵）
- 真鍋の道標（当館所蔵）



2019年度 春季の展示資料解説③ 近世

しょうか おきて

商家の掟

おがたけ しきもく
—尾形家「式目」—

初代尾形徳兵衛（1741～1815）は香取神宮の神官尾形数馬の4男として生まれました。23歳のとき、豪商国分勤兵衛（大国屋）が営む土浦の醤油醸造所に奉公し、のち支配人へ昇進、天明5（1785）年45歳のとき暖簾分けを許されて大国屋徳兵衛と名乗り、中城町（現土浦市中央1丁目）に店を構えて穀物や古着を商い始めました。現在、呉服店「大徳」として続く店の始まりです。古くからの商家が少ない土浦にあって、店の歴史は200年を超えます。

「大徳」尾形家には、初代徳兵衛が文化7（1810）年正月、店で働く者たちに示した掟「式目」が伝わっています。商家は規則や家訓、家法など家のきまりを定め、家族と奉公人を教育し、家業を営んできました。

「式目」は17項から成り、火の用心、盗賊用心、博打禁止などの定番に加え、商品は貸し出さない、手付金を払ったら穀物は必ず徴収する、出入りや金銭の授受は帳面に付けるなど、商売の要点を押さえています。

「式目」の文頭と文末に注目してみましょう。文頭に掲げられ、最も重要だとされたのは、藩や侍への対応です。「藩の法令を守る」「（足音がするので）城内には下駄や足駄を履いていけない」「侍や町役人に対して無礼な振る舞いをしない」。土浦町は侍と町人がともに住む城下町です。藩や侍とのいざこざを回避することは、商家として経営を続ける基本中の基本でした。

文末は、この掟をまとめる結びの言葉です。懸命に働くことは「天道」、つまり、自然の道理にかなう、善悪の判断は各人が付けられる、互いにむつまじく暮らすことが大切だ、と説いています。細かな規則で縛り付

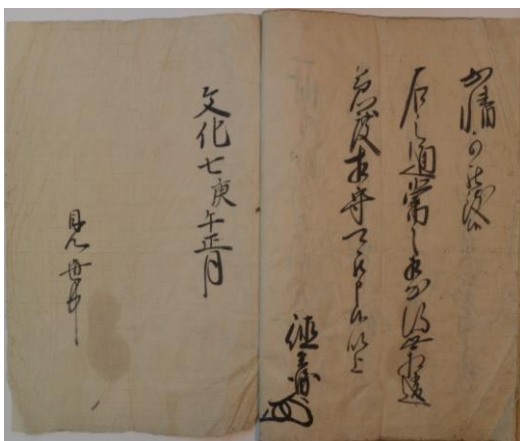
けない柔軟な方針と、根本的に人は善人であると考えた思想が、家族と奉公人に浸透した、これが200年を超えて商家が続く根源かもしれません。

（木塚久仁子）

※参考 入江宏『近世民家訓の研究』（多賀出版）

「式目」の内容

1	法度・触書を守る
2	城内へは下駄・足駄禁止
3	侍や町役人への無礼禁止
4	商品の貸出禁止
5	手付金を払ったら穀物は必ず徴収する
6	火の用心、特にくわえキセル禁止
7	盗賊用心
8	夜の用事は子供に行かせる
9	博打・勝負事禁止
10	四つ時（午後10時）以降の出入り禁止
11	羽織着用禁止
12	安物を購入する客にも丁寧に対応せよ
13	掛金は集金する
14	出入りは帳面に付ける
15	日々の記録も帳面に付ける
16	無駄遣い禁止
17	衣類は粗末なものを着る
文 末	精を出して働けば天道にかなない、繁盛にしながら。善悪は各人が判断できるはずだ。互いに気をつけて、和順を心懸けるべきだ。



「式目」最後の部分（個人所蔵）

6/1（土）11時・14時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも近世コーナーに展示）

- 覚（色川本店五十ヶ条 条目）（当館所蔵）
- 黒漆塗椀箱蓋・椀（当館所蔵）



くうと 絵葉書「空都水郷の土浦」

こうき
—皇紀2600年と土浦市制施行—

新元号が令和となり、30年続いた平成が幕を閉じました。昭和63（1988）年7月開館の当館にとっては、平成時代はまさに館の歩みそのものだったともいえます。

平成以前の明治・大正・昭和の時代、この時期にもうひとつ、「皇紀」という年の数え方があったことをご存知でしょうか。皇紀とは、日本書紀に基づき、神武天皇即位の年（紀元前660年）を元年として起算したものです。この考えに基づくと、昭和15（1940）年が皇紀2600年にあたりました。様々な記念事業が各地で計画され、今でも当時の記念碑や出版物を見つけることができます。

写真は昭和15年に発行された8枚組の絵葉書で、街並み、水の公園、亀城公園、桜川の桜と土浦橋、警察署、市役所が被写体となっています。外袋には「空都水郷の土浦」「皇紀二千六百年 土浦市制施行 記念発売」とあり、筑波山や霞ヶ浦が描かれています。土浦市の誕生も昭和15年、皇紀2600年にあたっていたのです。茨城県では水戸市、日立市に次ぎ、全国では174番目の「市」でした。合併による市制施行の方針は昭和11年頃からすでに打ち出されていましたが、反対意見も多く、実現には時間を要しました。

当時の土浦はどのような存在だったのでしょうか。現在では耳慣れない「空都」という言葉が注目されます。「空都」は『いはらき』新聞（茨城新聞）によると、昭和12年頃から登場し、「空都」だけで土浦を指すこともあったようです。空都と冠されるゆえんは、阿見村（現阿見町）におかれていた霞ヶ浦海軍航空隊にあります。昭和11年以降、土浦町は、中家村（昭和12年）、藤沢村虫掛（同13年）、東村（同14年）と合併し町域が拡大しました。さらに真鍋町と対等合併し、昭和15年11月3日に土浦市が誕生、同じ月に土浦海軍航空隊（通称予科練）が開隊しました。ふたつの航空隊は首都防衛の役割を持ち、本部こそ阿見村にあるものの、土浦と阿見の境界付近には多くの関連施設が整備され、第一海軍航空廠や海軍病院、海軍住宅などは土浦市域に存在しました。

皇紀2600年＝昭和15年は、土浦市にとっては記念すべき年であり、また当時の土浦の立ち位置や時代を象徴する、画期となった年ともいえるでしょう。（野田礼子）



（土浦名所）本町銀座豊島百貨店前通り



絵葉書の外袋

「空都水郷の土浦」（当館所蔵）

5/25（土）11時・14時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも近代コーナーに展示）

- 紀元二千六百年式典参列証（当館所蔵）
- 写真週報（当館所蔵）
- 皇紀二六〇〇年記念写真帖（当館所蔵）



市史編さんだより

『土浦関係中世史料集 下巻』編修余話

今回は史料収集に当たっての、資料の取捨選択についての苦労話です。古文書の写しには何人もの写しがあります。字や文章の違いだけでなく、内容に疑わしいものもあります。記録では、事件から時を経たものと、誇張や誤伝が混じります。それをよく点検しないとイケません。一例として、土浦の領主管谷氏の記録『続々群書類従 第四史伝部』に載る「菅谷伝記」（戦記物といわれ、根本資料を欠く部分が多いので、参考資料という形で収録）の中から、「常州無垂合戦の事」という項目についてお話をします。この項目については史実でないことが分かりましたので、参考資料にも収録しませんでした。その内容を紹介します。

「小田氏治の部将菅谷政貞は古河公方の援兵として、子の政頼や由良・行方・海上等と共に佐竹義信と戦ったが、永禄二年三月小田方より菅谷政貞、佐竹方より宇留野四郎義元を大将として、無垂（部垂、現常陸大宮市）へ出陣した。政貞は、長引けば佐竹の本軍が加わり苦戦するとみて、一夜で決しようと風雨の中を静かに押し寄せ、太田軍の夜明けの到着を待つ佐竹勢に、いっせいに突きかかった。佐竹も兵を静め、義元の『引くな、命を棄てよ』との下知に、兵も力を得て菅谷軍を柵より外へ追出す。政頼が真騫に乗込む、海上武経も十文字に駆け通る。武経・政頼共に三十代、今宵を限りと駆けめぐる。政貞これを見て、『古河公方の加勢として出張し、逃げては氏治へ申し訳なし、間に紛れ近寄って無切り必ず首を取るな（首を取らずに進め）と下知し、またもり返す。義元の郎等どもは菅谷父子の援兵と聞き、死にもの狂いに働けば、少しは御引退をとの声もかかる。そこへ政頼らが逃さぬと突けば、義元勢は駆りたてられ、由良・戸崎らが本陣へ打ち掛かれば、義元勢は惣敗軍となった。風雨静まり日も輝く。大将宇留野義元その外討ち取る首三百余、政貞は古河へ参上し、公方より政貞への感状が出される。政貞は氏治へ戦いの様子を報告し、土浦へ帰った。」

これが大要です。『大宮町史』によれば、佐竹義元は義篤の弟で宇留野家を継ぎ、小貫俊通の部垂城を攻略して義篤と対立し、部垂12年の乱といわれる争乱になりました。一時和議が成立しましたが、天文9(1540)年義篤は突然部垂城を攻撃し、義元一族を滅ぼして城を廃城にしたということです。この事件は佐竹家の内紛で、小田・菅谷氏とは関係がなかったのです。ところがこれに関する古文書がありません（資料1）。右の古河府奉行人連署の感状です。部岳は部垂の、義依は義俊の誤りで、奉行人に築田右馬助(助実)が抜けています。『神奈川県史 資料編3』や『古河市史 資料中世編』に、天正11(1583)年からの奉行人連署の書状が載りますが、高は最初大和守で、13年から修理亮になります。18年まで修理亮を称していますから、この文書はその間ということになります。恐惶も尻切れで、他は恐惶敬白とあります。義元との時代が合いません。

この感状は『牛久市史料 中世I』に収録されているのを拝借したのですが、上記の「菅谷伝記」を裏づけるものとして偽作されたか、或いは逆にこの文書をもとに「菅谷伝記」の記事が書かれたか、と思われま

す。いずれにせよ、『土浦関係中世史料集 下巻』には採用しませんでした。史料を調査している私たちにとって『牛久市史』でこの史料を載録されたことは、非常に有り難い事であったと思っています。感謝も込めてこの話を閉じたいと思います。

一色氏久他連署感状写（武家雲箋）
今度小田天庵為二名代一、嫡子彦次郎政頼を相
俱早速出張、於二部岳一挑戦被レ尽二粉骨一、佐
竹宇留野四郎義元生害之由、無二比類一御手柄
無二申計一候、依レ之以二御墨付一被レ仰候、於二
当家一名菅之御事候、恐惶
三月十八日
一色右衛門佐氏久
町野備中守義依
小笠原兵庫頭氏長
高修理亮氏師
菅谷撰津入道殿

資料1 一色氏久他連署感状写

(元市史編さん係 非常勤職員 雨谷昭)

土浦藩土屋家の横顔

新コーナーでは、土浦城を200年治めた土屋家の歴代藩主を、系譜を読み込みながらご紹介します。

基本的には『寛政重修諸家譜』を用い、「土屋系図」（『茨城県史料 政治編4』所収）で補足しました。引用はゴシック体で示しています。

※（）内は筆者註



その一、土屋 数直【つちや かずなお】

初 定直 辰之助 大和守 但馬守 従五位下 従四位下 侍従

土屋民部少輔忠直が二男、母は森川金右衛門氏俊が女

慶長十三年生まる。（延宝七年）四月二日卒す。年七十二。寛翁道智融相院と号す。

浅草海禅寺に葬る。

室は水野石見守忠貞が女。

■ ■ ■ **家光付き** 元和二年はじめて台徳院殿（秀忠）に拝謁す。時に九歳。五年大猷院殿（家光）に附属せられ、八年より御近習の奉公をつとむ。

数直（1608～79）は、土浦藩土屋家初代となった人物です。9歳、将軍秀忠に拝謁し、12歳、のちに3代将軍家光となる竹千代付きとなり、15歳、その近習になりました。数直は家光よりも4歳年下ですが、少年期から家光に忠誠を誓っていました。自宅謹慎中であるにもかかわらず、上洛する家光にこっそり付き従って密かに京都に入ったという話が、逸話集「有言録」に伝わっています。家光は、謹慎をやぶって数直は付いてきているはずだと断言し、京都郊外に隠れていた数直を探させたといえますから、家光も数直の性格をよく知っていたのでした。家光との強い信頼関係のもと、数直は頭角を現していきました。

■ ■ ■ **老中就任** （寛文）五年十二月二十三日に老職にすすみ、二十七日従四位下に昇る。

慶安4（1651）年に家光が没したのち、数直は承応2（1653）年9月、4代将軍家綱の側衆となり、寛文5（1665）年に老中に就任しました。老中は将軍の最も身近に仕えるので、大名であれば誰もなりたいと望む職です。亡くなるまでの15年間在職しましたが、先の「有言録」には、部下のささいな無礼にも厳然とした態度をくずさなかった、相手が許しても無礼は無礼だとして大目付を叱りつけた、儉約を重んじるが、貨幣の価値を落とさず、江戸城の威厳を保つことに留意し、過度の吝嗇を避けた、などの逸話が伝わっています。

■ ■ ■ **土浦城を訪問** （寛文）九年八月十五日はじめて城地に行の暇をたまふ。

寛文9（1669）年6月25日、土浦城とその周辺を拝領し、初めて城持になりました。この年の8月15日、土浦城に入りました。9月1日には家綱に江戸に帰ってきたことを対面して報告していますから、土浦滞在は10日余りだったと思われます。数直が城主となったのは初めてのことで、どれほど感慨深く土浦を見渡したことでしょう。

数直は風雅を愛し、茶の湯を小堀遠州に学びました。博物館では数直手作りの茶杓「姫松」を所蔵しています。（木塚久仁子）

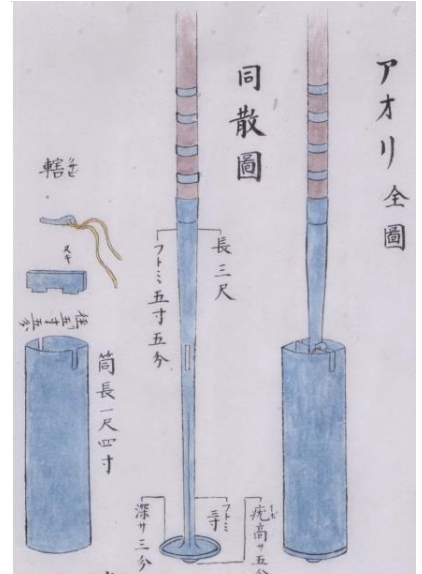
「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声や、サークル活動記録などをお伝えしております。

今号は、昨年度のテーマ展「井戸のある暮らし」でご講演をいただきました、能城秀喜さんに寄稿していただきました。

ナゾの井戸掘り用具「アオリ」、出現！

私が住んでいる千葉県君津市では、明治時代中頃に「上総掘り」という掘抜井戸工法が考案されました。「上総掘り」は「大坂掘り」を改良して考案されたといわれていますが、江戸時代の掘抜井戸の用具・技術の詳細はわかっていませんでした。江戸時代の掘抜井戸研究の前に立ち塞がっていたのは、「アオリ」というナゾの井戸用具。「アオリ」は、「桶」だと記した江戸時代の史料はありますが、形状は不明でした。

ところが昨年の夏、我が青春の「聖地」・土浦市(大学時代は、出島村・土浦市・石岡市で考古学研究活動をしていました)の市立博物館から、沼尻墨僊が寛政年間に描いた「鑿井図」という絵巻に「アオリ」が描かれていると知らされました。博物館から送られてきた写真を見ると、そこには想定外の高い櫓や、見た事がない「鏝」！そして、私の存命中に形状は解明されないうと諦めていた「アオリ」(写真)が、鉄製の筒として描かれていました!!江戸時代の掘抜井戸の用具・工法の絵画史料は愛知県の『農稼録』が知られていましたが、墨僊の「鑿井図」は質・量とも『農稼録』を遥かに上回っており、全国的にみても第一級の史料です。「鑿井図」の魅力は、この「霞」の全誌面を頂戴しても語り尽くせないの、また機会があれば紹介させていただきます。「鑿井図」が、広く知られて研究され、後世に伝えられていく事を、心から祈念申し上げます。



(袖ヶ浦市平川公民館 能城秀喜) 沼尻墨僊「鑿井図」(個人所蔵)

コラム(46) モノを取り巻く情報

市民の方から「自宅にこういうモノがあるが、博物館で必要なら差し上げます」という連絡を受けることがあります。このようなモノの多くは博物館で一定の手続きを経て受け入れられると、民俗資料と呼ばれる分類で収蔵されます。民俗資料を受け入れる場合に大事にしたいことがあります。それは、そのモノ自体が何なのか、どのように使うモノか明確であることは当然ですが、いつ頃、誰が使ったのかなど、モノを取り巻く様々な情報を聞き取ることです。

昨年度、市内で農家を営む方から納屋にあった「綿干しかご」を寄贈して頂きました。直径60cm位の竹製の浅いかごで、上げ底となっています。昭和30年代まで同家で利用され、自宅で機織りを行った寄贈者のお母さんが使用していました。お話を聞くうちに、当時、機を織るため自ら畑で綿を栽培し、収穫した実綿を乾燥するのに使用したことが分かってきました。つい最近まで、当時収穫した古びた実綿も残っていたといえます。

モノを取り巻く人々の経験や記憶などの情報は、そのモノが持つ価値をより高め、身近に感じさせてくれます。(関口満)

情報ライブラリー更新状況

【2019・5・11 現在の登録数】

古写真 596点(+1)

絵葉書 508点(+1)

※()内は2019年1月5日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞(かすみ) 2019年度

春季展示室だより(通巻第46号)

編集・発行 土浦市立博物館

茨城県土浦市中央1-15-18

TEL 029-824-2928

FAX 029-824-9423

<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/saction.php?code=43>

1~5ページのタイトルバック(背景)は、博物館2階庭園展示です。

2019年度春季展示は、2019年5月11日(土)~6月30日(日)となります。「霞」2019年度夏季展示室だより(通巻第47号)は2019年7月2日(火)発行予定です。次回の来館もお待ちしております。

※展示室だより「霞」は、当館ホームページからもご覧になれます(カラー版)